

# 八戸の里公園と美女堂遺愛碣<sup>けつ</sup>

杉山三記雄

天気の良い日は、よく近所の公園のベンチに座っている。ただ目の前の花壇をぼーと眺めている場合がおおいが空を見上げてみると公園になるまで土地の歴史を思い浮かべたりする。

## 公園の歴史

この八戸の里公園は昭和33年(1958)、旧布施市の時に設計されたというから60数年前に計画されたことになる。今ではアリーナ体育館、プール、相撲土俵、運動



場そして多くの人々が楽しみ散歩できる公園になっている。公園の面積として現在、5.1ヘクタール。

甲子園球場と同じくらいの広さになる。私のような昭和人間には5町余りといったほうがぴったりとくるかもしれない。当時の市長は布施市長の鈴木義仲氏(写真)だが故人をなられている。先見の明に優れた人で、昭和11年(1936)には全国に先駆けて旧小阪町(町長は鈴木義仲氏)が住宅地を売り出して当時としては名建築である東翠園住宅が誕生した。東翠園とは大阪市の東の緑の多いところという意味があった。したがって大阪の船場の人たちが住宅地として購入して移り住んだ人が多いと聞く。



当時の大学教授、文化人も多く含まれていた。現在八戸の里駅と呼ばれるが、当時は東翠前駅と名付けられた。その時代の注目を受け

た東翠住宅群は今や残っていない。しかしながら引き続き瀟洒な住宅が今も多く、風格ある地域となっているといえよう。(スケッチはまだ残っていた東翠園住宅(筆者画)中国に「水を飲むときは井戸を掘った人を忘れてはならない」ということわざがあるが、この公園を楽しんでいる多くの人は、まさしく鈴木義仲市長の名前を少しでも頭に浮かべてもらえれば有難い。



鈴木義仲氏が1959年(昭和34年)に当時の西ドイツ・ヴェディング自治区と布施市との姉妹都市協定を結んだ。そして協定から37年後、かの地区から親善訪問団が東大阪市を訪れ八戸の里公園に記念植樹と記念板設置(写真)された。1996年(平成8年)。



記念植樹のクスノキは写真次頁のように大きくなっている。土地はほとんどが当時の旧中小阪村の農



このころ昭和33年といえは学校にプールがない時代で私など同様に野の川や池に泳いでおり、不衛生で危険が多かったものだ。そのため

家の人たちが所有していたが、市からの土地買い上げの話が持ち上がった村はそれに賛成するものと反対するものとまふたつに別れ大騒ぎになったと伝わる。毎晩のように話し合いが行われ、その結果、ようやく公園建設にまとまっていったらしい。公園予定地の中に水泳プールが設置され多くの人が喜び利用した。



こん巻きー「民具歳時記」から



ドブ貝



ドブ貝を炭火で焼いて醤油をかけると香ばしい味がした。八戸の里公園あたりの川や池でよく採れたドブ貝。小坂墓地の西隣には大きな池があり、一その舟が浮かんでおり、投げ網がさされていたのをときどき見かけたものだ。今はその池も埋められてい

河内の文化と風習とか懐かしくて話題上がるので拾ってみる。  
郷土の食事

に溺死して命を落とす子どもたちが多かった。日本が太平洋戦争の痛手を大きく残しており、経済的には高度成長できない時で、まだまだ全国的には貧しい時代であった。そのような状況で公設の大きなプール建設は大きな救いになり喜ばれたのは想像できるだろう。写真のように花壇を囲むようにベンチが置かれていた。ベンチに人達が座り自然と人びとは顔見知りになり、やがて話をするようにもなる。見知らぬ人同士が昔話をときどきする。



る。いわば動物、昆虫などと人々は共生していた時代であり、人々の信仰心も篤かったので、何か不思議なことが起こる。このテーマについて掘り下げ「狐につままれた」話しに終わらないよう努めてまいりたい。

『狐は人をだますの？』 私たちの世代は「狐が人を化かす」話を、大きくなるうちに何回か耳にした。今と

なつて、こういうことをいうと科学的に  
進歩した世の中に「そんな不思議なこと  
がありえない！」というブーイングが、若  
い世代から発せられ、冷やかな視線が  
向けられてくるように思う。狐は人を化  
かす”話しは、昔の人の生活環境を考え  
ると豊かな自然のなか、類いの話しが世間  
に広がっており、そして、化かされた”と  
話す人が真剣味を帯びていることだろう。  
調べてみるとこれが大阪に限らず全国広  
く存在し、さまざまな民話にも収録され  
ている。

身近な例として旧若江村では、筆者の  
聞いた話しは若江の西方、旧小阪村へは  
広い田畑の中、細い一本道を、小阪墓地の  
近くの楠根川の小橋（前頁下段写真、現在  
は総合体育館アリーナ付近）を渡って行  
かなくてはならなかった頃、夜もふけて  
橋を渡ろうとすると知り合いの村人が川  
に入り、「いい湯や。おまえも入ったらど  
うか」としきりにすすめるという。酒に酔  
って夜分にこの橋を渡ろうとすると狐が  
出てきて若い娘に化けて川を風呂に仕立  
てて、入るように仕向けるという話しが  
まことしやかに伝わっていた。（「あした  
づ」9号「『狐は人をだますの？』から一  
部再掲）

## 公園内の戦没者慰霊塔

### 【建物入口前】

東大阪市戦没者慰霊塔

説明文



この慰霊塔は祖国のために生命をささげた戦没  
者並びに戦災死者の霊を慰めかつそのめいふくを祈  
るためひろく浄財の寄贈によりて建てられたもので  
ある

われわれは諸霊のみまえにおいて あやまちなく恒  
久の平和を祈願す  
るものである



昭和三十八年八月  
二日  
布施市戦没者慰霊  
塔建設推進委員会  
会長 上野義雄

（上野義雄氏は名  
誉市民称号贈呈日…昭和44年9月27日 生年  
月日…明治27年4月11日（昭和53年8月26日  
逝去）

東大阪三市合併促進連盟会長、総合計画審議会会長、  
社会福祉協議会会長などの要職を歴任され、市政の



発展と社会福祉の  
向上に大きく寄与  
された。また、商  
工会議所会頭、東  
大阪信用金庫理事  
長などもつとめら  
れ、本市産業の振  
興に多大な貢献を  
された。

東大阪市が誕生し  
て初の名誉市民の  
称号を贈った。以  
上は東大阪市のホ

ームページから）

この建物前の説明板に説明している。今の公園には  
平和な幸せの顔々を多くみられるが戦前の日本では  
戦争が繰り返されていた。

私の父親はハガキ一枚で戦場に駆り出されて愛す  
る家族や郷土、国などのために戦場で亡くなったの  
だ。当時の父親の享年33歳で私は2歳だった。こ  
のように捧げたものは全国で300万名に及ぶとい  
われている。私の父親の場合は若江の忠霊塔に眠っ  
ている。戦前は「忠君愛国」の時代であり国家が大  
きく関わっていたのだ。この公園では戦没者慰霊等  
と言われ、戦前では若江のように忠霊塔と名付けら  
れているように、建設時期により異なってくる。若  
江忠霊塔は昭和18年に建立され、ここ慰霊塔は昭  
和38年の戦後になる。  
歴史は時代によって変わってくる。歴史は時代の権  
力者によって大きく塗り替えられる。

園内の小径を歩いていると巨摩の杜がある

巨摩の杜と呼ばれる所があり、東大阪中央ライオンズクラブが建てた石碑がある。「巨摩の杜」という立派な石碑があることをご存じの方が多くと思われる。



この巨摩といえは東の古村の若江に昔から巨摩という集落があり大変に興味がある。時代と歴史に関して次に「巨摩の杜」の石碑に関連して記していこう。

若江から八尾にかけて巨摩郷が形成され、有力な朝鮮半島からの渡来人の巨摩氏が支配した。若江の薬師寺に清和天皇より三代目多田満仲の四男美女丸(源賢)の祈願所がつけられたと述べている。若江の公民館前にも美女堂に関連する重要な石碑が残っている。美女堂氏遺愛碣であり、東大阪市石碑という史料に収録されている。

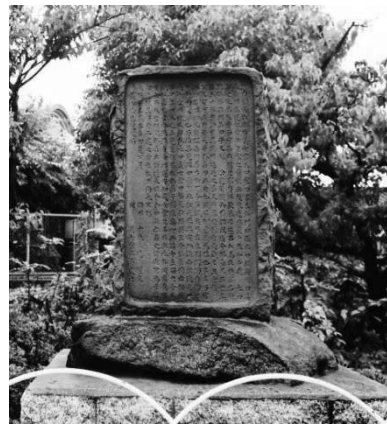
出家した美女丸が源賢と名乗り若江に拠点を置き田畑を拓き川をつくり若江から八尾にかけて領土とし河内源氏の一大勢力となる。

八尾法眼ともいわれた源賢に関係して若江にも歴史ある次のような石碑が残っている。

### 大坂城代太田侯に仕えて本貫地の若江へ

この石碑を建立した勝喜の五代前に当時の下若江村から仕官した勝興の領主であった太田侯とは遠江(とおみ)の国、掛川藩主である太田資次である。

資次は大坂城代として一六七三年〜八四年、資晴は一七三四年〜四〇年、資始は一八二八年〜三十一年の三名が務めた。資次が大坂城代に在職中、上若江、下若江両村の領主になっているので勝喜が碑面に刻んだ内容が歴史的事実として浮かび上がってくる。没落し農家になった勝興が、領主に仕官できたのは有能な人物であったのは勿論だが、摂津源氏の同族の縁も重視されたのではと推察される。太田家は清



和源氏頼政流であり、さかのぼると資長(道灌)がいる。清和源氏を祖とする勝興とは同族のつながりがあり、その結びつきの強さは現在からは想像がたい

ほどのもので同時に懐かしみがあったのだろう。仕官した美女堂家は、長年の世代、一五〇年にわたり職務に督励し勝喜は大目付賄に昇進し、太田家の重臣となる。『大坂城代用人日記』(田中朋子編 大阪市史編纂所発行)に見るとその中、勝喜は、碑文にある美女堂沢右衛門の名で重要な案件処理にあたり、たび、登場している。

この『大坂城代用人日記』天保二年(一八三一)

正月一日から五月五日まで、当主太田資始(すけもと)の同藩用人、渡邊崎右衛門の記した記録である。資始はこのあと京都所司代に栄進したのち、江戸に行き徳川幕府の老中の地位に昇っていく。

### 歳月経て亀裂入った石碑

石碑はゆえあつて平成三年十二月に若江公民分館前に移転し、(運搬の依頼に対し、公的援助なきなか、何分年数経った石碑は破損の恐れがあるため、引き受けする業者がなく困ったが移転に協力してもらえ業者がみつかりホッとした。

東大阪市教育委員会によって傍には説明版が設置されている。この移転には際し、当時の若江公民分館運営委員長だった故白山義春氏に大変お世話になったことをご紹介し、感謝の意を誌す。当石碑は、建立されて一八〇年を迎えるが用材が和泉砂岩で相当地に傷み、特に石上部に大きな亀裂が入ってきた。小学生児童も通る通学路の前において、安全性も考慮し、関係者にも相談し、崩壊の危機を避けるため補修の処置を講じている。その際、費用の制約や技術的に困難がある中、補修を建設業の山本雅文氏に依頼したところ快く受けていただき、目的を達せたことも感謝の意をここに表しておきたい。

その他、現若江公民分館の関係者等多くのご協力があった。この石碑は、若江の土地と郷土の歴史を伝えているだけに伝わってきた経緯を述べておく必要がある。明治十八年生まれ祖母からは聞いているのは若江の杉山の土地に建立されており、曾祖父が杉山の先祖に関連する石碑だといっていたと話した。大正五年発行の若江村誌、同十二年発行の河内府誌に石碑の記載あり。昭和三年発行の大坂府

史蹟名勝天然記念物には、次の記載がある。「・・・もと藤本吉左衛門（もと美女堂氏）邸内にありしが、明治初年薬師寺境内に移し、更に大正四年現位置杉山邸内に移せり、蓋し旧地に復したるなりといふ。・・・」筆者注：ここに「藤本」は、「藤原」の間違いだと思慮する。

残念ながら検証できる術と資料は、今の私をもってない。ただ建立した美女堂勝喜の先祖を想う情と土地にまつわる歴史が未永く伝わっていけばとの願いが今の私の心情だろう。

若江公民館前に移設してから、石碑に登場する吉左衛門の子孫を名乗る藤原氏が遺愛石について面会の申し入れがあったのでお会いした。面会の主旨は石碑が先祖にかかわりがあるので現在住まいする茨木市に自宅に移したいとのことだった。いきさつや石碑の内容から考えて若江から移転することには同意できなかった。相手の方は残念そうだったが、おひきとりをしてもらった。

さらに加えると八尾の常光寺という歴史ある境内に



は、八尾城の城主といわれる八尾の別当顕幸の五輪塔の墓があり、多田満仲の子賢快（源賢）が八尾僧正を名乗り、孫の10世あとが別当顕幸と言われている。（以上は八尾市関連資料から）（写真は八尾の常光寺にある八尾別当顕幸の墓）  
しかし、源賢が八尾別当の顕幸につながるかどうかの確証には、それを記述するペンの手が止まらざるをえない。これは確かな物証がないとも言われるなか私の能力では如何ともしがたい。  
時の権力者によって歴史は塗り替えられることがあるので、ここは冷静に考えていきたいので事実だけを述べるにとどめておきたいものだ。  
（この項、「あしたづ」13号「美女堂遺愛碣と若江」から一部再掲）



八戸ノ里公園については、私の中学生時代からおよそ60数年まえのことだが広大な田んぼだった。公園になる前は広大な田んぼに近所の人がアヒルを飼っていた。  
その風景は思い出すとこのようなスケッチになる。下手すぎてお粗末なる絵となった。（上の絵）  
飼手が広大な田んぼにたくさんアヒルを従えていたものだった。今では牧歌的な幻の風景の中にある。しかし物事は川の流れるように変わり、歴史が刻々と刻まれていくのだろう。

（まち・むら文化研究会）